

ツバメが出ていったあとの静寂が、かえって騒がしく聞こえた。
ざわめきはきっと……、私の胸の奥から生じるものだ。
体中が重たくて、その場から動くことができずにいる。
窓に映った顔があまりにひどくて、苦く笑った。

「なんて顔、してるのよ」

こぼれ落ちた涙はそのまま、スカートに染みを作っていく。
私の選択は間違っていて、いない。
きっとそう、きっと……。

「雪……」

降りはじめた雪に、両親が死んだ日のことを思い出す。
ツバメが、どうか無事に——。
とっさにそう願ってしまう自分に、また苦笑した。

薬を手に入れた彼はもう私とは関係のない人で。
これから、少しずつ忘れていくのだろう。
今日あったことも、時間とともに薄れていく。
傷はきっと、癒えていくはずだから。
心の中で、彼に感じていた思いを、深く深く、沈めていく。

やっと動きはじめた足を進めて、自室へ戻った。
彼に解雇の手紙を出して、それから、新しい庭師を呼ぶ準備をして。
それから——。
うまく思考が回らなくて、私はベッドに座った。

大丈夫、ひとりに戻っただけよ。
またここから、やっていくの。
そう唱えなければ、足元から崩れてしまいそうだった。



雪が降る中、俺は実家である薬屋クロラントにたどり着いた。
父の執務室まで走って、事情を説明して、ふたりで母の部屋へ向かう。

手にした薬を、飲ませた。

母の顔色はみるみる明るくなり、父と顔を見合わせる。

改めて、この薬のすごさを知って、俺は両親に頼んだ。

「どうかこの薬のことは秘密にしてほしい」と。

それが、俺にできるルルへの償いだと思ったから。

それから数日後。

母の体調はどんどん良くなっていった、もう家の中を歩けるほどになった。

仕事ばかりだった父が食事をともにし、会話も増えた。

以前では考えられなかった家族団らんの時間を過ごす中、俺はルルを思う。

ひとりで食事をしている彼女の姿を思い描いてしまう。

彼女をひとりにしたのは俺だ。

けれど、もう、戻ることはできない。

そう考えていれば、ルルから手紙が届いた。

薬屋リーファの庭師^とを解く、と。

用件のみの簡潔な文面。

見慣れた字なのに、まるで別人が書いたかのように思えた。

正式な解雇を受けた俺はこれから、父とともにクロラントで働くことになるだろう。

もうこれで、俺がリーファに、クレールに行くこともない。

そしてルルは、新しい庭師を雇って――。

それを悲しいと、さみしいと思う気持ちは奥底にしまった。

どうか、彼女の孤独を払う人が来ますように。
俺にはそう願うしか、できなかった。



新しい春がやってきた。
新しい庭師がやってきた。
ゆっくり穏やかに生活が変わっていく中で、私は、彼の姿を見てしまう。
それは、薬草園で。
それは、キッチンで。
そのたびに私は、唱える。
これは忘れていく記憶だと。

新しい春がやってきた。
咲きはじめる花々に目を細める。
両親とともに過ごしていく日々の中でも、俺はルルのことを忘れないだろう。
それは、薬草を摘むときに。
それは、巡る季節の中で。
そのたびに俺は、祈る。
どうか彼女が笑っていられますようにと。

エンディングⅠ【祈りは淡く、記憶は遠く】